教科等や分野名：国語科

文学的な文章において複数の叙述を根拠にして自分の考えを形成する児童の育成

～「根拠・理由・主張の３点セット」を視覚化したクラゲチャートによる個の思考と「フリー交流」を取り入れた学習活動を通して～

新潟市立上所小学校
太田　魁（令和元年度）

【主張】
小学校国語科の文学的な文章の読解指導において、児童が複数の叙述を根拠にして自分の考えを形成できるようにするには、「根拠・理由・主張の３点セット」を視覚化したクラゲチャートによる個の思考と、自分の座席を離れて自由に友達と意見交換をする「フリー交流」を取り入れた学習活動が有効である。

1 研究主題設定の理由

小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説国語編の第３学年及び第４学年「C 読むこと」では、「登場人物の行動や気持ちなどについて、叙述を基に捉えること」が求められている。ここでは、物語全体を見通し、複数の場面の叙述を結び付けながら、登場人物の気持ちの変化や性格を具体的に想像していくことが重要である。これらは、児童自身が文章を精査・解釈したり、自分の考えを形成したりするための基盤となる資質・能力である。

しかし、これまでの授業を振り返ると、児童はある一文や単一の場面を根拠に自分の考えを持つことはできるものの、物語全体を見通して複数の場面の叙述を結び付けて自分の考えを形成することに課題があった。

そこで、本研究では「根拠・理由・主張の３点セット」を視覚化したクラゲチャートによる個の思考と、自分の座席を離れて自由に友達と意見交換をする「フリー交流」を取り入れた。

この２つの手立てにより、児童が複数の叙述を根拠として自分の考えを形成できるようになると考え、本研究主題を設定した。

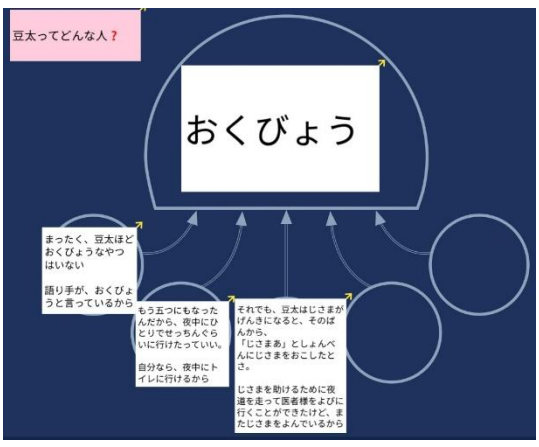
(1) 課題解決のための方策①：「根拠・理由・主張の３点セット」による個の思考の確立

本研究では、鶴田（2023）が提唱する「根拠・理由・主張の３点セット」を取り入れる。これは、主張を支える根拠（叙述）に加え、学習者の既有知識や生活経験を結び付ける理由も述べる言語技術である。

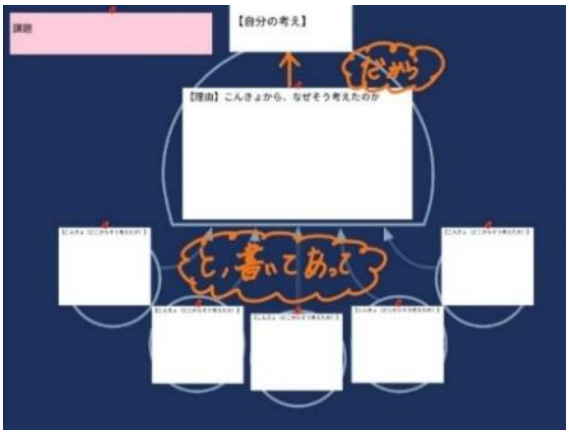
この思考プロセスを児童にとって分かりやすくするために、「クラゲチャート」を改良したシンキングツールを取り入れる。従来のクラゲチャートは、頭の部分に自分の考えを書き、足の部分に根拠や理由を書くことが多い。しかし、従来のクラゲチャートでは、児童が根拠・理由・主張を区別して表現することが難しいという課題が見られた（図 1）。

そこで、本研究では以下のような改良を加えた。まず、クラゲの足に複数の根拠（叙述）を記述する。次に、「と、書いてあって」という言葉を経て中央の頭部に理由を書き、「だから」という言葉を経て最上部に自分の考え（主張）を書くというレイアウトに改良した（図２）。

このように、「根拠→理由→主張」という思考プロセスや接続詞を視覚化することで、児童が複数の叙述を結び付けながら、筋道立てて自分の考えを形成することができると考えた。



【図１　従来のクラゲチャート】



【図２　本研究で活用するクラゲチャート】

（2）課題解決のための方策②：「フリー交流」を取り入れた学習活動

本研究では三浦（2021）が提唱する「フリー交流」を取り入れる。これは、座席の制限から解放され、自由に友達と意見交換を行う形式である。フリー交流の全６種類の中から、本研究では「相談交流」（何人かで集まり、思ったことや感じたこと、考えたことなどを自由に話し合う相談形式）を取り入れる。相談交流を取り入れることで、自分の考えを形成することが困難な児童や、単一の場面や叙述だけで満足してしまう児童への手立てとして有効であると考えた。

個人でのクラゲチャートへの記入後にフリー交流（相談交流）へと移行し、互いのクラゲチャートを読み合ったり、自分の考えやその根拠などを説明し合ったりする。その中で、納得した考えや根拠などを自身のクラゲチャートに付け足していくことで、自らの考えを再構築し、より複数の叙述を根拠として自分の考えを形成することができると考えた。

【研究仮説】
文学的な文章の読解指導において、「根拠・理由・主張の３点セット」を視覚化したクラゲチャートを活用して個の思考を促し、他者との自由な対話を行う「フリー交流」を取り入れることで、児童は複数の叙述を結び付けながら、自らの考えを形成することができるだろう。

２研究の実際

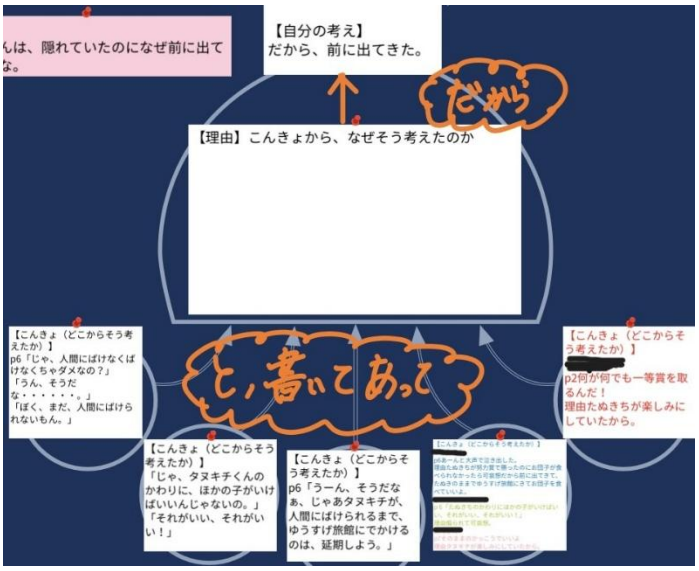
（1）実践①　単元名「物語のおもしろさを説明しよう」（新潟市立上所小学校３年３組令和８年３月実施）
使用教材「ゆうすげ村の小さな旅館～おだんごのすきなお客様～」

本時では、物語の中心人物（つぼみさん）の行動の背景に多角的に迫るために、「つぼみさんは、かくれていたのになぜ前に出てきたのかな」という学習課題を設定した。

抽出児Ａは、クラゲチャートを活用した自力解決の際、「ぼく、まだ、人間に化けられないもん」等の根拠を３つ記述することができたが、理由は空欄のままであった。

その後、班の友達とフリー交流を行った際、Ａ児は自分の考えや根拠・理由を伝える姿は見られなかった。しかし、友達の発言に耳を傾け、友達のクラゲチャートを見ながら、自身のクラゲチャートに根拠を付け足す姿が見られた。特に、友達の「たぬきちが努力賞をとったのにお団子が食べられなかったら可哀想だから、たぬきたちの前に出てきた」という発言に納得した様子を示し、一人では見落としていた叙述や中心人物（つぼみさん）の心情をクラゲチャートの足に追記していた。このように、言葉による発話が苦手な児童であっても、フリー交流を通して互いのクラゲチャートを読み合うことで、物語全体から複数の根拠を集めることができた（図３）。

しかし、本時終了時においても、理由の欄を書ききるまでには至らず、複数の根拠を統合して理由・主張へと昇華させる点には課題を残した。



【図３　抽出児Ａのクラゲチャート（本時終了時）】

本単元終了後に児童に実施したアンケートの結果と児童のワークシートの発現率は以下の通りである。

①児童アンケートの項目	児童アンケートの結果
クラゲチャートを使うことで、複数の根拠から自分の考えを書くことができた。	25 人中 24 人（96%）
友達と自分の考えを交流することで、自分の考えが広がったり深まったりした。	25 人中 25 人（100%）
②本研究の手立て（教師の見取り）	**成果物への発現率**
自力解決時、複数の叙述を根拠にしてクラゲチャートに自分の考えを書いている。	25 人中 6 人（24%）
「フリー交流」を通して、複数の叙述を根拠にして、クラゲチャートに自分の考えを書いている。	25 人中 9 人（36%）

児童へのアンケートでは「クラゲチャートで複数の根拠から書けた（96%）」「フリー交流で考えが広がった（100%）」という数値であった。一方で、実際のクラゲチャートへの記述発現率は自力で24%、交流後で36%にとどまり、児童の意識と実態の間にギャップが見られた。

この要因を分析したところ、以下の２つの課題が明らかになった。

①クラゲチャートの記述における課題：児童にとって「主張」「理由」「根拠」の区別が曖昧だったり、教師が記述手順を明確にしておらず、どこから書き始めてよいか迷ったりする姿が見られた。
②フリー交流（相談交流）における課題：交流の自由度が高すぎたため、児童は何をどのように相談すればよいか分からず、発言量に差が生まれたり学びが停滞したりする姿が見られた。

そこで、実践②に向けて以下のような変更を加えることとした。

①「学習課題の２択化」と「記述手順の整理」：課題を２択にして自分の立場（主張）を最初に明確にさせる。これにより「自分の立場を証明する根拠を探す」という目的意識を持たせる。また、記述手順を「主張の確定→根拠の収集→理由づけ」と定めて児童に提示する。
②「準備交流」の導入：課題を２択にしたことに伴い、同じ立場（考え）を選択した児童同士で集まる「準備交流」を設定する。自分の考えを形成する時間を十分に取った後、同じ立場の仲間と根拠や理由を確認し合うことで、より対話を深めることができるようにする。

（2）実践②　単元名「物語の山場をとらえる」（新潟市立上所小学校４年４組令和８年６月実施）
使用教材「走れ」（東京書籍）

本時では、物語のクライマックスにおける中心人物（のぶよ）の心情に迫るため、「のぶよがほこらしく思えたのは、自分ががんばって走ったからか、家族の関係がよくなったからか」という学習課題を設定した。

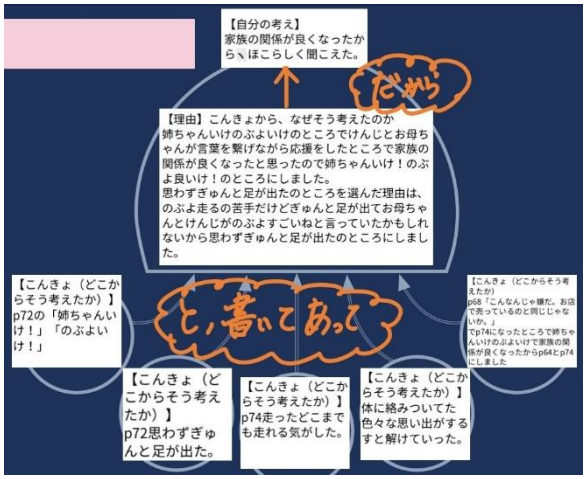
実践①からの最大の改善点は、課題に「①自分ががんばって走ったから」「②家族の関係がよくなったから」の２択を提示した点である。まず立場（主張）を確定させ、その根拠をクラゲチャートの足に集め、最後に理由を頭部に書く手順としたことで、「主張」と「理由」を明確に区別して記述できるように工夫した。

抽出児Ｂは、自力解決の段階で「課題の２択化」によって立場を「②家族の関係がよくなったから」と定め、物語前半の喧嘩の場面（p.68「こんなんじゃ嫌だ」）や応援の場面（p72「姉ちゃんいけ、のぶよ行け」）など、複数の叙述を根拠に挙げながら自分の考えや理由を形成することができていた。（図４）

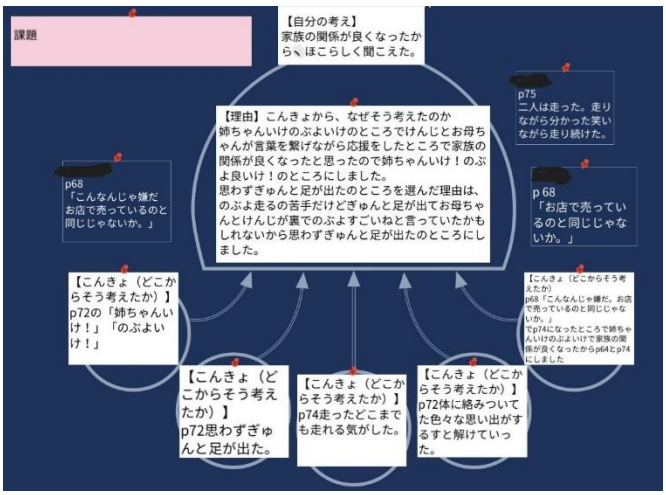
その後のフリー交流（準備交流）において、Ｂ児は同じ立場を選択した友達とクラゲチャートを見せ合い意見交換を行った。

Ｃ１:ねえ、（抽出児Ｂの名前を呼ぶ）最初どこって言った？
抽出児Ｂ：えー、ｐ７２の「姉ちゃん行け、のぶよ行け」のところ。
Ｃ２：僕も同じでした。
抽出児Ｂ：○○さんもだよね。（Ｃ３のクラゲチャートを覗き込む）○○さんは？（Ｃ３の名前を呼ぶ）
Ｃ３：僕はｐ６８の「こんなんじゃいやだ、お店で作ったのと同じじゃないか」のところにしました。
Ｃ２：あー喧嘩した場面ね。ぼくも同じ。一部だけどね。
Ｃ１：まぁ、Ｃ３と一緒だけど、「こんなんじゃいやだ、お店で作ったのと同じじゃないか」のところで、なんかけんかしてるじゃん。そのあと二人で応援しているから、もしそのままずっとけんかしていたら絶対に応援しないから、どっかで仲直りしていると思う。それは見つけていないけど。

準備交流の中で、特に友達が挙げた p.74「走った。どこまでも走れる気がした。」などの根拠に納得し、クラゲチャートの足（根拠）に付け加えた（図５）。最初から複数の叙述を根拠に自分の考えを形成できていたＢ児が、交流を通して「走った　どこまでも走れる気がした」などの叙述に気付き、自身のクラゲチャートに付け加えることで、物語全体を見通して、より複数の叙述を根拠にして自分の考えを深めることができた。



【図４　抽出児Ｂのクラゲチャート（フリー交流前）】



【図５　抽出児Ｂのクラゲチャート（フリー交流後）】

本単元終了後に児童に実施したアンケートの結果と、児童のワークシートの発現率は以下の通りである。

①児童アンケートの項目	児童アンケートの結果
クラゲチャートを使うことで、複数の根拠から自分の考えを書くことができた。	27 人中 21 人（77%）
友達と自分の考えを交流することで、自分の考えが広がったり深まったりした。	27 人中 25 人（92%）
②本研究の手立て（教師の見取り）	**成果物への発現率**
自力解決時、複数の叙述を根拠にしてクラゲチャートに自分の考えを書いている。	27 人中 18 人（66%）
「フリー交流」を通して、複数の叙述を根拠にして、クラゲチャートに自分の考えを書いている。	27 人中 21 人（77%）

児童アンケートでは「クラゲチャートで複数の根拠から書けた（77%)」「交流で考えが広がった（92%)」という結果であった。

特筆すべきは、ワークシートへの記述発現率が自力解決時で 66%（実践①：24%)、交流後で 77%（実践①：36%）に上昇したことである。この要因は 2 つあると考える。1 つ目は、「課題の 2 択化」によって自らの主張が明確になり、自力解決の段階から根拠となる複数の叙述を探し、理由を構成するという見通しが立ったことである。2 つ目は、「準備交流」を通して同じ考えの友達と交流することで、一人では気付かなかった視点を取り入れ、より複数の叙述を結び付けて自分の考えを形成することができたためだと考える。

3　結論

本研究では、文学的な文章の読解において、複数の叙述を結び付けながら自分の考えを形成する児童の育成を目指し、「『根拠・理由・主張の 3 点セット』を視覚化したクラゲチャート」と「フリー交流」の 2 つの手立てを講じてきた。

第一に、「根拠・理由・主張」の三層構造と接続語（「と、書いてあって」「だから」）を視覚化した改良型クラゲチャートは、児童が自立的に複数の叙述を根拠に自分の考えを形成する上で有効であった。特に実践②において学習課題を 2 択化し、「主張の決定→根拠の収集→理由づけ」と記述手順を明確にしたことで、抽出児 B のように自力解決の段階から複数の叙述を根拠にして自力で理由まで記述できる児童が増加した（自力解決時：24%→66%)。

第二に、「フリー交流」において「準備交流」や「相談交流」を学習過程に意図的に位置付けたことで、自ら形成した考えをより多角的なものへと深め・再構築させることができた。特に、課題を 2 択化し、同じ考えの仲間と集まる「準備交流」を経ることで、対話のハードルが下がり、お互いのクラゲチャートを比較・相談し合うことで、自分一人では見落としていた根拠や理由に気付くことができた。その結果、物語全体を結び付けて、より複数の叙述を根拠とする考えを形成することができた（交流後：36%→77%)。

4　研究の反省、今後の課題

本研究の課題として以下の 2 点が挙げられる。

第一に、記述の「量（根拠の数)」から「質（理由づけの深まり)」へのさらなる高まりの追求である。複数の叙述をクラゲの足に挙げることは定着してきたものの、中央の頭部（理由）において、挙げた複数の根拠をどのように関連付け・統合して主張へと結び付けるかについては課題が見られた。根拠となる叙述同士の相互関係や、登場人物の置かれた状況・心情の変化をさらに深く分析した理由づけを行わせるために、思考を揺さぶる発問の精査や、根拠を構造的に統合して理由を記述できるようなワークシートの工夫などを検討する必要がある。

第二に、「フリー交流」における明確な指導意図をもつことである。準備交流の導入により対話の質は高まったが、交流の深まりにはまだ児童間の差が見られる。単に自由な対話を保証するだけでなく、学習の段階やめあてに応じて「何を焦点化して相談・比較させるのか」という明確な目的意識を児童に持たせるよう、教師の適切な見取りと介入、交流形態の精査を今後も進めていく必要がある。

5　参考文献

文部科学省「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 国語編」2018 年
鶴田清司「論理的思考力・表現力を育てる『根拠・理由・主張の 3 点セット』を活用した国語授業づくり」2023 年
三浦剛「自ら動いて読みを深める『フリー交流』 6 つのバリエーション」2021 年
中野裕己「授業で育む国語の『学び方』」2025 年
髙橋達哉「国語授業が変わる！発問大辞典」2022 年